1989-33 174

「月刊アーガマ」 №104 pp.110-111 (1989年10月)

Agama 書架

「哲学する」ということ

竹田青嗣著『現象学入門』を読んで

橋爪大三郎

むずかしいのが値打ち、と言わんばかりでとっつきの悪かったフッサールの現象学を、これはまた思い切って、誰にでも手のとどくサイズに噛みくだいてある。この本を読んでもまだ、現象学のことがわからない人は、よくよく自分が哲学に向いていない、と愕然(がくぜん)としてもらいたい。

著者竹田青嗣(たけだせいじ)氏のいろいろな思いが、この一冊にはこめられているようだ。

平明なわかりやすさが基調である。ふつうに生きることと、ものを考えることの距離をなくすこと。哲学することの躍動をとりもどすこと。下手な哲学の専門家には滅多にお目にかかれない、誰でも哲学できるはずだという卒直な確信が快い。それを読者と共有しようとする態度が、わかりやすさの根底になっている。

そのうえで著者は、現象学を、もっとも果敢で先端的な哲学と位置づける。デリダなどポスト構造主義の潮流あたりが、現象学を、形而上学とか独我論とか決めつけるのは、とんでもない誤解なのだ。なぜなら近代哲学の根本的な謎、つまり《〈主観〉/客観〉の難問にたいしてほぼ完全なかたちで解答を与えたのは……フッサールの現象学だけ》(24頁)なのだから。

ポイントは現象学がなぜ、独我論的構成をとるのかだろう。著者によればそれは、当然の選択である。フッサールは、主観/客観の一致(真理)を確かめることなど不可能である、と洞察した。にもかかわらず、誰もが世界・他者・事物の存在を「確信」してしまうのはなぜか? むしろ、それを解明すべきである。そのためには、主観の側から出発すること。それも、主観をとらえる一切の憶見(ドクサ)を排除し尽くした(還元した)ところから出発することが、戦略的に重要だ——。

フッサールの著作は、いつでも積木くずしのように、もっとも原理的な場所から議論を組み上げていっては、いいところで一から出直す繰り返しで、全貌がつかみにくかった。しかしこの本を読むと、すっきり晴ればれ、フッサールという人物をつき動かす思考の必然が見えてくる。このわかりやすさは、すべての語彙をいったん咀嚼したうえで、嘘のない著者自身のことばに直して語っているところから来るものであろう。最後の章では、ハイデガー哲学との接続や、後続するさまざまな批判に対する反論もとりあげられていて、いちだんと広がりが出ている。まことに理想的な、現象学の入門書の登場である。

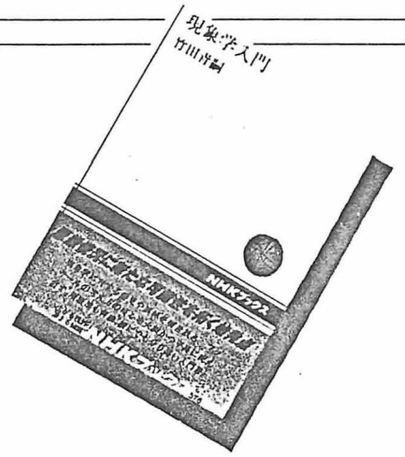
しかし、現象学と別の路線を進む私の立場からは、あえて異論も挟まねばなるまい。

著者はフッサールの境位が、余人の及ばないものであるという。しかし著者の描くところを信ずるなら、たとえば、確実性の問題を問いつめていった後期のヴィトゲンシュタインも、かなり近いところにいたことになるのではないか。彼の〝言語ゲーム〟の議論もまた、あらゆる懐疑論に抗して、人びとの日常のふるまいのなかの「確信」を掘り起こす作業にほかならなかった。同様に記号論や構造主義も、それほど捨てたものでないはずだ。主観/客観の図式を組み換えることが、そもそもこうした議論の動機であるから。

一方、現象学には固有の問題点もある。著者はフッサールの「他我」論の難点を、《フッサールが〈知覚〉直観を「他なるもの」の了解の第一起点(原的なもの)とした点にある》(136頁)と指摘する。そして、そのかわりに《情動的所与》を「原的な所与」に位置づけ直したらよいと言う。しかし私は、主観の彼岸にあるという点で、「言語」の重要性こそ無視できないのではないか、と思う。《要するに現象学で言う「本質」とは、言葉の意味のことだと考えていい》(59頁)とまで言うのであれば、《メルロ=ポンティやJ・デリダのように、〈知覚〉直観を「身体」や「言葉」によって〝構成〟されたものと考えるのは、現象学的には〈客観〉から〈主観〉を説明することになって背理となる》(137頁)と、簡単に言ってすませるわけにはいかないと思う。このあたりの議論を始めるときりがないが、著者は別の機会に氏の情動=エロス論をさらに敷衍(ふえん)されるそうなので、楽しみに待ちたい。

竹田氏は、フッサールがこれまでおおむね誤解されてきたと言う。私もそんな誤解のくちだったと思う。氏の主張には説得力がある。が、フッサールの文章に、そのような誤解を受けても仕方のない部分があったことも、また確かではないか。本書のフッサール像が解釈として成立するか否か(成立してほしい!)は、テキストの詳しい検討にゆだねるべき問題で、私には何とも言えない。しかし、現象学の積極的かつ現代的な意味を最大限に引き出すことに成功している本書の、功績は疑いようもないのである。

(はしづめ だいさぶろう・社会学)



竹田青嗣著「現象学入門」(NHKブックス・日本放送出版協会)

1889-33 2/4

「月刊アーガマ」No. 105（1989年11月）pp. 138-139

Agama 書架

「語りえぬもの」を語る

「ウィトゲンシュタイン・文法・神」

橋爪大三郎

英国の神学者A・キートリーが、一九七六年に出版した処女作の翻訳である。ヴィトゲンシュタインの思想、特に言語ゲームの考え方が、現代の神学にどのような波紋を投げかけたか、最近の研究動向を踏まえて縦横に論じる本書は、信仰をもつ人々だけでなく、宗教と言語・哲学の関わりを考えるすべての人々に、きっと有益であるに違いない。

ヴィトゲンシュタインが前期の『論理哲学論考』で、「語りえぬものについては沈黙せねばならぬ」とのべたことは有名だ。「語りうるもの」とは、この世界のなかで経験可能な出来事のこと。だから、神の存在やこの世界の終末など、キリスト教信仰の主要部分は「語りえぬもの」になってしまう。しかし、彼は、だからと言って宗教と無縁であろうとしたわけではない。むしろ終生、宗教者とも言うべき態度を保持していたというのが、著書キートリーと、とりわけ訳者星川啓慈氏の主張だ。

ところで、ヴィトゲンシュタインはのちに、前期の「写像理論」の立場を捨て、言語ゲームを提唱するようになる。言語の意味は、世界（出来事の集まり）と言語の対応（像）にあるのではない。むしろ言語の用法（文法）にある、とする立場である。すると、宗教は、「語りえぬもの」を語るという、ある種類の言語の用法であるところに、その根拠をもつと言えるのではないか。

このような示唆を受けて、欧米の神学者、宗教哲学者たちが、言語ゲームの考え方にもとづく多様な研究を進めているらしい。それがどのようなものか、私は知らなかったが、本書を通じてその一端に触れることができたのは有益だった。（なお、この分野に関しては、訳者星川氏の新著『ヴィトゲンシュタインと宗教哲学』（ヨルダン社）と近著『宗教者ヴィトゲンシュタイン』（法蔵館）が、現在わが国で唯一のものと思われる。）

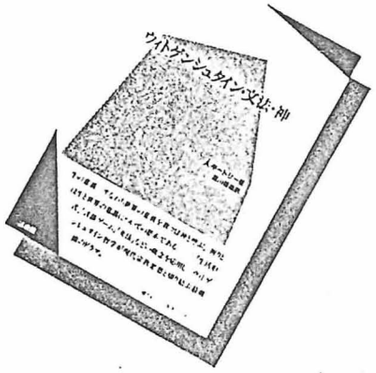
こうした研究動向の、核になるのが「ウィトゲンシュタイニアン・フィディズム（信仰主義）」である。星川氏の整理によるとこれは、《(a)…言語ゲームおよび生活形式は、それ独自の論理構造や体系を有している…。(b)それゆえ…外部からの批判を免れている。(c)キリスト教は独自の閉じた体系をなす言語ゲームであり、非キリスト教的言語ゲームからの批判や攻撃は妥当しない。》（「訳者まえがき」）と主張するものだという。「宗教を信じるものに宗教の真理は自明であり、宗教を信じないものに宗教を語る資格はない。」という、よくあるタイプの平行線の焼き直しと見てよいのかもしれない。

著書キートリーは若い口に、ティリッヒの著作に触れ、学問の道を志したという。そして、ヴィトゲンシュタインの影響を受けた宗教哲学者たち、ことにD・Z・フィリップスの仕事に触発されながら、宗教と信仰の意味を現代哲学の思考回路にそくして考えていった。その思索の成果が本書である。

本書で紹介されているわが国であまりなじみのない論者たちの、もつれあった論争をたどるのは、必ずしも容易ではない。構成もすっきりしない。訳文も、日本語としていまひとつこなれていないので、すんなり頭に入らない。おそらくこれは、博士論文をベースにしたという生硬な原文のせいだろう。著者キートリーがどれだけの力量をもって、この分野で考えるべき本質的な問題に切りこんでいるのか、見極めがつきにくい。

そこで、私の理解をのべると、まずキリスト教神学は、神の「存在論」を根本問題とせざるをえない。神の「存在」は経験的事実でないから、「信じる」という態度を人間の側に要求する。ところが、言語ゲームの理解に立つと、神の「存在」は「信じる」というゲームの効果であることになってしまう。ヴィトゲンシュタインが《信仰に忠実な人々を恐れさせる哲学の「悪霊」と考えられ》（三頁）たりするのも、当然だ。

人間の活動をのこらず言語ゲームで記述できるものなら、宗教も例外でない。そしてこの記述のなかで、伝統的なキリスト教の信念体系は解体されてしまう。論者がめいめい試みているのは、自分や他の信者たちの「信じる」という遂行を、言語ゲームの理解といかに両立させる（させない）か、という多様な悪戦苦闘なのだ。



A・キートリー＝著　星川啓慈＝訳
「ウィトゲンシュタイン・文法・神」（法蔵館）

これらのなかには、宗教の総体を、人々の信念に還元してしまう試みも含まれる。これでは神は「死んで」しまう。それに対してキートリーが支持するのは、《優れた哲学的分析は、信念の文法を明瞭にすることによって、真の信念をそのあるがままにしておく》（六十七頁）と考える、フィリップスの立場だ。

なるほど確かに、《神の絶対的な存在と信仰の価値》（六十七頁）を奉ずる言語ゲームというものを考えれば、それは、第三者の横槍によって破壊されないかもしれない。そのかわり、メンバーが補充できないで、ゲームが立枯れていくことだって充分考えられる。「信念」の砦に立てこもり、同時代の知との緊張関係を遮断せずにいられないようでは、先細りが避けられないのではないか。わが国では、宗教的信念が脅かされているという危機感が人々をとらえたりしないので、その切実な感触がわかないが、英米の宗教思想も次第に衰弱と混迷の度合いを深めているのではないかというのが、この本を読んでの私の印象であった。

（はしづめだいさぶろう・社会学）

1989-33 3/4

「月刊アーガマ」No.106 pp. 128-129　(1989年12月)

Agama 書架

大胆、明快、刺戟的仮説

池田清彦著『構造主義と進化論』

橋爪大三郎

明快かつ豪放なおもしろさ。しっかりものを考える確かな足取りをついていくだけでも、ハイキングで見晴らし台に立てたような爽快感を味わえる。進化論や生物学に縁のうすい読者でも、科学という営みの哲学的なありかにいろいろ思い当たることがあるはずで、有益このうえない。

圧巻はまず、ギリシャ哲学を扱うかわきりの第一章。ここだけで、本戸銭（二、二〇〇円あまり）は元が取れたも同然だ。

著者池田氏は、科学の本質からおもむろに説きおこす。科学とは、現象（変なるもの）を、なんらかの形式（不変なるもの）によって、コード化するものだ。これには当然、無理がともなう。ゆえにわれわれは、形式（たとえば名辞）と独立に、時間がその外側を流れていく、というふうに理解するのだ——。

だいたいこんな枠組みに乗せて、池田氏は、タレス、アナクシマンドロスから、デモクリトスを経て、アリストテレスにいたるギリシャ自然哲学の滔々（とうとう）たる歩みを概説する。古代の学者たちの大胆な洞察と、その論理必然的な行き詰まり。それが再び、つぎの洞察をうみ……という、知のダイナミズムが脈動する。

＊

ギリシャ哲学が進化論に、何の関係があるんだろ、といぶかるなかれ。《本書は「構造主義」という時間とは最も無縁なものと、「進化」という時間に最も関係深いものを架橋しようとする試み》（五頁）なのだ。時間とコード（遺伝子、種、もそうである）との関係を、原理上つき詰めたのが、ギリシャ哲学なのだから。

つぎに池田氏が目を転ずるのが、ラマルク、ダーウィン、メンデルといった、進化論、遺伝学説のおおどころである。

古典は、後世の相当いい加減な解釈に汚染されているのが常だ。その例にもれず、上記三人の思想も、慎重な磨き出しが必要である。その手がかりが、フーコーの『言葉と物』（新潮社）。一七～一八世紀古典主義時代のエピステーメーと、一九世紀（われわれの時代）のエピステーメーの、断層をきちんと踏まえることが重要になる。

たとえば、用不用説で有名なラマルクだが、実はこれは補助仮説にすぎない。彼の進化論の正体は《進化時空間斉一説とでも呼ぶべきもの》（七四頁）、つまり、生物は自然発生する端から、分岐せず等速で進化を続ける、という説なのだ。いっぽう、一九世紀のエピステーメーを体現するダーウィンの学説の要点は、池田氏によると、《自然選択説という論理形式を記述することにより、「生物」と「進化」が実はトートロジーであることを発見した》（一一〇頁）ところにある。『種の起源』は、ネオ・ダーウィニズムの単純な教条などには収まりきらない、生命現象の洞察にみちた多義的な書物なのだ。

メンデルも同様である。彼の考えた「エレメント」は、いわゆる遺伝子でなく、《形質発現のための原因の総体》（一四三頁）、つまり、池田氏のいう「構造」を含むものなのである。《天才的な科学者の常として、ダーウィンと同じようにメンデルもまた、彼自身の理論のなかにさまざまな可能性の萌芽を含蓄していた》（一四七頁）。

＊

進化論の古典学説に溯（さかのぼ）るのは、好事家の気まぐれでない。分子遺伝学が成功したおかげで、《DNA＝遺伝子（複製子）＝遺伝するすべて、という図式》（一七一頁）を大方の生物学者が信じこんでしまった。その図式が、根拠のない憶見にすぎないことを暴くためである。

さて、池田氏の唱える「構造主義進化論」は次のような、さしあたりの《理論的予測》（二一四頁）だ。まず、《生物固有の構造は物理化学法則を下位構造とする、その上位構造》（二一五頁）であると考える。しかも《上位構造のルールは必ず下位構造における可能性の限定であり……限定自体は必ず無根拠》（二一六頁）なのだ。無根拠な、つまり恣意的な構造によって現象を説明するところが、「構造主義」たるゆえんだ。

その構造だが、氏は、《真核生物のDNAの中には……全DNAの変化範囲を定めている特別な塩基配列（群）》（二二九頁）、つまり「安定化中枢遺伝子」が存在する、とまず仮定する。つぎに、安定化中枢それ自体を安定させる「保持遺伝子」の存在を、仮定する。さらに《全保持遺伝子の変化範囲を定めている遺伝子》（二四〇頁）、すなわち「P遺伝子」があり、それが最初の「安定化中枢遺伝子」に安定を保証されている、と仮定する。

池田清彦＝著
『構造主義と進化論』（海鳴社）

この多段階の構造を考えると、生物の形態変化や進化を、かなりうまく説明できる。というより、《進化の一般理論は私がここでやっているのと同型になる他はないと私は思っている》（二四一頁）。論理的に考えて、それ以外の可能性がないからだ。

専門にわたる議論の細部を、私は判断しかねるが、大枠において大変説得的で有望な研究プランと思われた。このように大胆で刺戟的な議論が登場したことを喜びたい。社会学にとってさえ、示唆深い記述が数々ある。仮に本書の具体的な仮説が反証されてしまうようなことがあっても、本書の生命は永続する、とのべておこう。

（はしづめだいさぶろう・社会学）

1989-33 44

「月刊アーガマ」No.107 (1990年1月号) pp.166-167

Agama 書架

明快で私的な「知」の運動

『神秘主義のエクリチュール』
五十嵐一＝著
橋爪大三郎

「神秘主義」と聞けばすぐ、超能力や秘伝・秘法の類を思い浮かべてしまうわれわれだが、それは誤りだと著者は言う。一風変わった修業方法でも、高尚な知識のジャングルでもない、ごくまっとうな宗教体験のいちばん大事な部分こそ、神秘主義でできている、というのがこの本の主張だ。

と言われると、意外な気もする。著者五十嵐氏は、子どもの頃から神道に馴染み深かったという自身の体験もおりまぜながら、そういう読者の戸惑いをほぐしていく。取り上げられているのは、宮沢賢治、ルーミー、荘子など多彩なテキストだが、中心になるのは、良寛、そして何と言ってもスフラワルディーである。

スフラワルディー。一二世紀イランの神秘思想家。彼のテキスト『幼児性の状態について』に五十嵐氏が出会ったのは、いまから十年あまり前、テヘランに留学中のことだった。〈この時以来、神秘主義の秘密が見えてきたと同時に、これを軸として宗教的知恵の佇まいが窺えるのではないかと確信できた〉(三二頁)という。本書は、スフラワルディーのこの小さな書物に対する、彼の解題とも言えるだろう。

そこでこの『幼児性の状態について』だが、こんな内容だという：ある少年が、知識を得ようと思いたち、砂漠へ出て長老にめぐりあう。そして文字のイロハから、知識の手ほどきを受ける。が、ある日、ろくでなしの男の言葉に気をとられて、長老を見失なってしまった。それから少年の、悟達にいたる道行きが始まる——

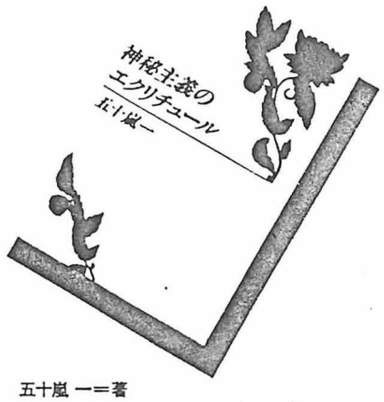
この書物が、神秘主義の本質を尽くしている。著者の言によると、〈神秘家…の書き残したもの〉には〈一つの味わいが感得される。〉〈présence感覚…absence感覚…両感覚をもって、神秘主義を特性づけ、定義しよう〉(四七頁)と言うのだ。

présence感覚とは、〈「ここに今」hic et nunc こそすべてという態度〉のこと。たとえば良寛と貞心尼の相聞歌も、ソクラテスやイエスの言行もその発露である。もう一方のabsence感覚は、〈「何かを忘れてはいませんか?」との裡なる声〉(七三頁)とも言うべきもの。〈absence感覚の拓けとは、自己はもとより身のまわりのものに過度に執着、愛着することを避けよ、という戒めに近い。〉(七四頁)〈知識を身に着ければ着けるだけ、そのように身に着けられるものの限界を了解し、いつでも脱ぎ捨てられるような状態へと心境の変化が認められる。〉(五九頁)その極まるところ、〈自分で自分を養っているのではない、反対に自分は養われているのである、との自覚〉(九一頁)、いわば放下の感覚に至るであろう。これこそ宗教の内外を問わぬ、神秘的体験の核である。と著者はみるのだ。〈それ故にこそ、開祖の理念や情熱から遠く離れて宗教各派の派閥抗争や、繁瑣な教理論議の悪しきスコラ化が浸透すると、必ずといって宜しいほど神秘主義の動きが誕生もしくは復活してきた〉(四九頁)。

こうして〈悟達に入った人は、舞うが如くに生きる。〉〈présence感覚とabsence感覚とがほぼ同時に、あるいは一瞬一瞬のフラッシュ・バックの裡に生起し共鳴しあう姿〉(一三九頁)が舞いである。良寛もブッダも、舞うように人生を送り、人生を閉じた、と著者は言う。

このような読解を試みる、五章からなる本文に、三つの断章をつけ加えた本書は、〈筆者である私個人の感性と知的興味だけで出来上っている〉(四頁)という。論旨は明快であり、五十嵐氏が日頃下敷きにしている宗教理解が率直に語られていて、読者にも有益であろう。

ただ一つ疑問が残るのは、ここでのべられているような知のあり方を、果して「神秘主義」と呼ぶのが適当か、という点だ。良寛やスフラワルディーは、宗教という巨大な運動の全体からみても、そこから派生するいわゆる神秘主義の運動からみても、ごく小さな部分にしかすぎない。筆者がそこに読みとる知の運動を、「神秘主義」とよび直すのは自由だとしても、それがどの宗教にも共通する土台だと言うのなら、その論証が必要になる。そして、従来神秘主義とよばれてきたものの実態は何で、なにゆえその名に値しないのか、という議論も必要だろう。



五十嵐 一＝著
「神秘主義のエクリチュール」(法蔵館)

神秘主義の本場であるイスラム教についても、仏教やキリスト教の神秘思想についても、私はあんまりよく知らない。それでも、本書でのべてあるのとはだいぶ違ったものではないか、と想像がつく。そういういわゆる神秘思想について、何か書いてあるのではないかと思って、本書を手に取った読者も多いはずだ。読んでみたら五十嵐氏の主張にかなり納得してしまったとしても、どこか肩すかしを喰ったような、割り切れない思いが残るのではないか。

〈祖父が神主を兼ねていて…私は今でも神社の前を通ると自然と頭が下がり、柏手をうつ心構えになる〉(四頁)と書いてあったりするので、著者の言う「神秘主義」は、ひょっとすると、日本的な宗教感性の別名か、などという疑問も頭をかすめる。外国の神秘思想研究家が、本書をどのように評するか知りたいものだ。

(はしづめだいさぶろう・社会学)